

小児緩和とグリーフケア  
臨床心理士 西尾温文

はじめに

私は、緩和ケアチームで、成人及び、小児のがん患者及び家族の心理的援助及び相談に携わっている。また、メディカル相談では、遺族ケアも行っている。

医療技術の進歩によって、治療が進んだとしても、生物であるヒトの死が不可避であることに変わりはない。つまり、人は誰しも亡くなり、親しい人を喪い、Grief (悲嘆・グリーフ) を経る。多くの場合、人はグリーフ過程を、それぞれが所属する文化、信仰する宗教のもとで家族や友人に支えられながら辿っていく。

ところが、死の迎え方、言い換えるところが見送り方によっては、人を喪った Loss (喪失) 体験が Trauma (心的外傷・トラウマ) になり、苦悩を抱え込むケースがある。

日本では、グリーフケアを行っている医療機関は数えるほどしかない。私を知っている限りでは、埼玉医科大学国際医療センター遺族外来、国立がんセンター家族ケア外来、聖路加国際病

院での「大切な人を亡くした子どもと家族の集い」である。医療機関に限らなければ、臨床心理士が行う心理療法で、グリーフケアはよく扱われるテーマの一つである。

グリーフケアが対象とするのは、喪失体験がもたらす悲嘆反応であって Posttraumatic Stress Disorder (PTSD) ではないが、トラウマを解消していく方法は、PTSD への心理療法と同じ方法が用いられる。それは、トラウマ体験を繰り返しイメージしたり、話すことである。トラウマ体験をイメージしたり話すことで、感情が表

出され、カタルシスを体験する。また、話すことで、思い出したくない、心の整理がつかないトラウマとしての記憶が、心の中の棚にきちんと整理され治まっていく。

では、話すことがまだ十分にはできない子どもたちのグリーフケアはどのように行えばよいのだろうか。

私は、子どものグリーフケアと小児緩和ケアを学ぶことを目的として海外研修を行った。

ダギーセンター

子どもたちへのグリーフケアは、その多くが米国内土オレゴン州に1982年に設立されたダギーセンターをモデルとしている。ダギーセンターは、

オレゴン州に3箇所しかないが、ダギーセンターをモデルとしたプログラムは、全米500箇所で行われており、米国以外では、日本も含め40数カ所で行われている。

ダギーセンターへは、日本からも毎年研修ツアーで人が訪れる。私もこれまで2度参加した。ダギーセンターは、脳腫瘍のため13歳で亡くなった少年の愛称ダギーから名前をとっている。

彼は精神科医 Elisabeth Kubler-Ross (1926~2004) (エリザベス・キューブラー・ロス) に手紙を書いた。

「生命とは何? 死とは何? どうして小さな子どもたちが死ななければならぬの?」。キューブラー・ロスは少年に返事を書いた。その手紙は、「ダギーへの手紙」と言われ、日本でも邦訳本「ダギーへの手紙」がアグネス・チャンの訳で出ている。ダギー少年とダギーセンターの創設者 Bev Chappell について、ダギーセンター入り口に掲げられている写真(図1)には次のように書かれている。



図1



2009年に焼失し、2013年に再建された。

次回、ダギーセンターが提供するプログラムを紹介したい。写真はダギーセンター、ポートランドからバスで20分ほどのところにある。一度建物が焼失したが、4年後、3億9千万円の寄付で再建された。

図1..ダギー少年

写真下の文。「ダギーは9歳の時に脳腫瘍と診断された。彼は自分が死んでいくことを知っていて、入院している他の子と死についてよく話していた。看護師の Bev Chappell はダギーがみんなと話をしているのを見て、子どもたちが自分たちの言葉で話をして、お互いに死を理解しようとしていることに気づいた。」

1982年に Bev はダギーを讀えて、ダギーセンターを設立した。ダギーは13歳で亡くなったが、ダギーセンターで彼の名は永遠に記憶される。なぜなら、ダギーがいなければダギーセンターも存在しえなかつたからだ。